

ひながたを頼りに 素直に教えを実行しよう



おさづけの理を拝戴したその日、すぐにおさづけを取り次ぐ修養科生

真朋

発行所
天理教芦津大教会
〒546-0003
大阪市東住吉区
今川8丁目6番32号
電話 06 (6702) 1980
FAX 06 (6700) 1854
Eメール shinmei@ashitsu.or.jp
印刷所 天理時報社

ひながたの道がどんな日もある。ひながたの道にはいろ／＼ある。誠の道も蒔いた事がある。なれども、何年経てばこうという理が、外れてはあろうまい。

明治22年11月7日

教祖は、初めは周囲から笑われ謗られ、道が広がってからは官憲からの厳しい迫害に遭われました。そんな苦難の中でも、教祖は喜び勇んで、人をたすける心一条でお通りくださり、後からこの道をたどる私たちに、どんな中も喜びをもつて乗り越えられることを、身をもつて教えてくださいました。

この教祖のひながたは「できる人だけ」分かった人だけ」のひながたではありません。心一つによつて、すべての人がどんな中でも陽気に勇んで通ることができる「万人のひながた」とお聞かせいただきます。

病気を患ったときや、人間関係に悩んでいるときなどは、頭で分かっているけれども教えが心に治まらず、勇めなくなります。そうした節のときにこそ、教祖のひながたに照らして喜びを見出す機会です。節の中に喜びが見つかり、心が治まって素直に教えを実行できるようになれば、その身上や事情は生き節となり、たしかるチャンスへと変わります。

教えに足を踏み入れたばかりの方も、代を重ねた方も、ひながたを頼りに素直に教えを実行できる「たすかり上手」なお互いでありたいと思います。

正面方

今冬も寒波がきて、北海道や日本海側は大雪となった。「なぜ、そんな大変な所に住んでいるんだろう」と疑問に思うこと

がある。

お道では「与えを喜ぶ」とお聞かせいただく。例えば、配偶者や住む所、食べ物や着る物、立場や起きてくる事柄など、全ては神様から「ちょうどいいもの」を与えていただいているのだ。もちろん、身上や事情などもそうである。最初は喜ぶことはできないが、そこにこもる親神様・教祖の親心が分かり、大難を小難にしていたいたことが理解でき、受け入れたとき、感謝できるようになる。全てに意味があり、ちょうどいいと受け入れることが大切だと思う。

今、私が住んでいる所は雪はほとんど降らない。寒さが苦手な私にとって、神様がちょうどいい所に住まわせてくださったと、感謝でいっぱいである。

《春季大祭 挨拶》

日々教祖の教えを実践し
心づくり、理づくりに努力しよう

大教会長 井筒梅夫

皆様方には、勇んでこの道を歩んでくださり、成人を期して
たすけ一条にお励みいただきまして、誠にご苦勞様でございま
す。

また、コロナの感染が急増する状況下において、出にくい中
をご参拝いただきまして、今年の春の大祭を無事に勤めさせて
いただきましたこと、大変有り難い次第でございます。

さて、今月4日の年頭ご挨拶の席上、真柱様は、
道を伸展させるためには、いろいろな意味において、教祖の
年祭を勤めることは大切なことであると思いますので、次の
百四十年祭は勤めさせていただきたいと思っているのであり
ます。

『みちのとも』立教185年2月号5頁
とお述べてになって、ここに教祖百四十年祭を執行する旨を正式
にご発表くださいました。そして、

来年には、百四十年祭を目指す三年千日という動きに入って
いくわけであります。

と、来年からの年祭活動にも言及されました。

三年千日と仕切って勤められる年祭活動は、たすけの旬、成

同前

人の旬と聞かせていただくように、私たちが仕切って勤めるこ
とで、教祖が仕切ってお働きくださる旬であります。教祖の年
祭活動は、信仰の力を付ける絶好の機会と言えます。

この打てば響く時旬を、来年から迎えることになりました。
つまり今年は、来年に始まる年祭活動に備える年であり、三年
千日に臨むための下地づくりの年です。この一年、心づくりと
理づくりに励んで、来るべき旬に備えたいと思います。

ところで、心づくりと理づくりということですが、心づくり
は心の問題であって、理づくりは信仰実践であると言えます。
心ができてから行動に移そうとすれば、物事はなかなか進まな
いように思います。

例えば「御恩報じの心が治まったら、ひのきしんをしよう」
などと考えれば、いつできるようになるか分かりません。「に
をいがけやおたすけは、教理が心に治まってからだ」などと考
えれば、にをいがけをする人が出てこないかもしれません。や
はり、日々にひのきしんに励む中で、御守護を感じ、信仰の喜
びを味わって、そこから次の御恩報じの実行が生まれるでしょ
うし、にをいがけ・おたすけを実行するところに、人をたすけ
る喜びを味わい、教えを理解するようになって、新たなにをい
がけ・おたすけに発展していくのではないかと思います。あえ
て順序をつけるなら、行動を通して心ができ、そこから新たな
行動が生まれるということになるでしょう。信仰実践を通して
信仰心を養っていくことです。

心づくりとは、どんな心をつくるのか。それは親神様に受け

取っていただける心であり、教祖がお喜びくださる心です。教祖の年祭活動に備えるこの旬に、そのような心に成人できるよう、改めてわが心を見つめ直して、教祖から教えていただいた教えを、素直な心で純粋に実践させていただきたいものです。

なるほどの人に

私たちは信仰者として成人の道を歩んでいます。成人の姿というの人はよってさまざまでしょうが、人から導かれるばかりであったのが、人を導くようになるのも成人の形の一つです。ようぼくは、「人からたすけられる側」から、「人をたすける側」に成人させてもらわねばなりません。年祭活動に入れば、教祖の道具衆として、たすけ一条に、より励ませていただくのです。

こうした成人への過程で大切なこととして、真柱様は、

普段から教祖の教えられた

ことを身に行い、なるほどの人になる努力をすること
を怠ってはならないと思

います。 同前

とご教示くださいました。

なるほどの人にならせていただくこと。これを各々の目標の一つに掲げて、日々の暮らしの中で教祖の教えの実行、実践に励ませていただきたい

と思います。

日々教えの実践を

新型コロナウイルスの世界的な感染拡大が始まってから2年が過ぎました。現在はオミクロン株の感染が急激に増えてきており、これから先どのようなようになるのか分かりません。

このような状況にあつて真柱様は、

安心して御用ができることが、いつごろ来るのか予想もつきません。

安心して御用ができて、できなくても、時間は同じように過ぎていきます。できないのはコロナのせいだというようにせずに、与えられた条件のなかで、(中略)いまの時旬を考えて、それぞれのつとめを果たしていただきたいと思います。

同7頁

と、今の時旬をしっかりと思案して、一人ひとりが務めを果たせることができるよう、できるところから実行するようにと、私たち道の子の背中を押してくださいました。

来年から始まる年祭活動は、それこそ一手一つに勇みに勇んで勤めさせていただきたいと念願しています。そのためにも、今は三年千日への備えの年として、教祖の教えの実行、実践に日々励ませていただいて、心づくりと理づくりに努力をさせていただきたいと思えます。本年も一年共々に明るく勇んで成人の道を歩ませていただきますしょう。

本日の春の大祭、大変ご苦勞様でございました。

(要約)



《春季大祭 神殿講話》

信念を持つて

「だめの教え」を伝えよう

役員 竹内義忠

『天理教教典』に、

「我は元の神・実の神である。

この屋敷にいんねんあり。このたび、世界一れつをたすけるために天降つた。みきを神のやしろに貰い受けたい。」

とは、親神天理王命が、教祖中山みきの口を通して仰せになつた最初の言葉である。(3頁)と記されています。

「元の神」とは、この世と人間を拵えた、本元の神ということであり、「実の神」とは、人間世界創造以来、今もこの世の全ての営みを御守護くだされている、真実の神ということ です。

私は、この「元の神・実の神」であらせられる親神様が最高の神

様で、教祖が説いてくださった教えが世界で一番だと思つて信仰をしています。

しかし世界には、いろいろな宗教があり、それを信仰している人たちは、「自分が信じている神様が絶対で、一番である」と考えている人たちがばかりです。それは、その人が信仰する神様によつて、奇跡的な御守護を頂戴されたからだと思います。

立教以前のことであれば合点もいくわけですが、「十のものなら九つまで教え、なお、明かされなかった最後の一点」つまり、「だめの教え」を啓かれた天保9年以降も、他宗教にも現れている不思議な現象を見たときに、これをどのよう

に思案すれば良いのかということ
は悩ましいところです。

みかぐらうたに、
このたびはかみがおもてへあらはれて
なにかいさいをとき、かす

とあります。
よろづよ八首

「このたび」とは、天保9年10月26日。この立教の日に、親神様がこの世の表に顕現され、教祖の口を通して、「これからは、この世の全ての元について詳しく説いて聞かす」と仰せられたのです。

辯天宗からの改宗

知り合いの教会長さんから、代辯天宗を熱心に信仰されていた方が、天理教の教えに感銘を受け、後に天理教に改宗した経緯を聞かせていただいたことがあります。

その方は、柔道をする目的で、天理高校に入学しましたが、天理教については関心を持てなかったそうです。時を経て社会人になったとき、ある教会長さんから天理教の話聞き、教えの素晴らしさ

を知つて、修養科に入科。信仰を深めていきました。

そうした中、所属の会長さんから「自宅に親神様をお祀りしてはどうか」との話を頂かれましたが、その方は「天理教の素晴らしさはよく分かりましたが、私の家は代辯天宗を信仰していて、仏壇もお祀りしています。それを私の一存で、他の神様をお祀りすることは、先祖や親に対して忍びないので、折角ですがそれはできない」と、断られました。

その後もその方は、天理の教えを求め、信仰を続ける中、あるとき、『こふきばなし』という本を読み、親神様をお祀りすることを決めたそうです。そこには、くにさづちのみことの守護の理合いについて、皮つなぎの守護であり、仏法では、普賢菩薩、達磨大師、辯天、結びの神、黄檗山の神の守護であること。また、この世の金銭など、すべてのつなぎ物は皆、この神の守護である、という内容が書かれていたそうです。

この本には、くにさづちのみこと
の裏守護として、自身が信仰し
ていた辯天が説かれていたことに
気が付きました。

これを教祖が説かれていたとい
うことに対し、その方は非常に感
銘を受け、親神様をお祀りするこ
とになりました。教祖が説かれた
教えによって、先祖代々の信仰を
残しつつも、親神様こそが元の神
様であり、実の神様であることの
確信を持たれたのです。

法華の講元が入信

私の教会でも、三代会長の時代



に、この道の教えに感銘を受け、
他宗教から天理教に改宗されたと
いう記述があります。

明治 39 年、稗島村役場の職員の
A 氏が、姫島神社横の川で溺死し
ました。村人が寄り集まって引き
上げ、検屍を済ませ、座棺に納め
ることになりました。ところが、
身体が硬直して納めることができ
ず、困り果てているときに、「天理
さんに拜んでもろうたらどうや」
ということになり、村人が三代会
長を訪ねてきたのです。三代会長
は、「はい、行きます」と返事をし、
急いで神社へと駆けつけ、おさづ
けを取り次ぎました。しかし、一
向に柔らかなる気配もなく、周
りからは「そんな手で踊っても、
硬いものが柔らこうなるかいな、
天理さんなんかアカン」と聞こえ
てきます。

また、「こんなときは法華宗に限
る」と誰かが言い、法華宗の講元
B 氏にお願いすることになりました。
B 氏は信者を引き連れてやつ
て来て、太鼓を叩き、お経を唱え

続けたそうですが、遺体は一向に
柔らかなることはありませんで
した。

それを見た三代会長は、「もう一
度だけ私に拜ませてくれませんか」
と頼み込み、命懸けで腹を切る覚
悟で、今度こそはと一心不乱にお
さづけを取り次ぎました。頭、胸、
両手、両足とおさづけを取り次い
でいくうち、回りの人々から「柔
らかくなった!」と叫んでいる声
が、三代会長の耳にも聞こえてき
ました。身体全部に取り次ぎ終わ
ったとき、硬くて少しも曲がらな
かった遺体が柔らかなったので
す。「有り難いな、やつぱり天理さ
んや」と歓声があがったそうです。

その後、三代会長は、お礼参拝
におちばへ帰り、教会に戻ってき
た時、奥さんから「法華の講元さ
んが、訪ねてこられて、帰ってき
たら、すぐに知らせてほしい」と
聞き、B 氏を訪ねると次のように
言ったそうです。

「わしの家は代々法華宗で、今は
講元をしておりますが、昨日は鮮

やかな御神徳をお見せいただき、
ただただ心から恐れ入り、感服し
てしまいました。天理教の教理を
聞かせてもらえませんか」。

そこで三代会長は、お道の教理
を諄々と話しました。話が終わる
と、B 氏が、ポンと膝を打ち「こ
れや。法華宗を信仰していながら、
何か納得のいかんところがあつた。
今日から改宗させていただきます」
ということになったのです。

「法華の講元さんが、天理さんに
変わった」ということは、当時、
稗島村は言うに及ばず、近郷近在
まで、この話題で持ち切りとなつ
たそうです。

他宗教との比較

ひと昔前に、「オンリーワン」と
いう言葉が流行しました。世界に
たった一つの物は、希少価値があ
りますが、一つだけではその物の
真価が分かりにくくなる、とも言
えます。

そうした視点に立つと、この世
に天理教しかなかったならば、そ

の教えの本当の良さは分からない、とも言えると思うのです。比較対照ができる宗教があることによつて、だめの教えたる天理教の素晴らしさが、より鮮明になるのだと思います。

親神様は、立教のずっと以前から、仏教やキリスト教などを始めとする、多くの宗教を説いておられました。言わば、いろいろな宗教を存在させられたことの意味は、天理教が始まるまでの、下地づくりをされたということであり、いろいろな宗教があるからこそ、天理教もその中の一つの宗旨として、世界の人から受け入れられ、またその良さを認めてもらえるということにもなると思います。

だめの教えが説かれてから今日までの歴史はわずか185年ですから、今の段階では、皆が皆、「天理教でなければ幸せになれない」ということではないと思います。ある人にとっては、キリスト教や仏教が相応しい場合もあると思います。しかし私たちは、いんねんあつ

て、世界の多くの人たちに先んじて、だめの教えを聞かされたお互いです。

高山のせき、よきいてしんしつの神のはなしをきいてしやんせ

三号 148

とありますが、ここに出てくる高山とは、時代背景から見ると、教祖御在世当時の、由緒ある神社仏閣などのことを指しています。そこに属している神職や僧侶たちの説教を聴き、また親神様の話もよく聞いて、それを比較して、いずれが真実の教えなのかということをしつかりと思索してみるのがいいと仰せられています。このお歌は、世界のさまざまな宗教の教説と、天理の教えとを比較して、この道の教えをしつかりと学ぶことを急ぎ込まれているのだと思います。

比較宗教学というものもありますが、比較すればするほど、学べば学ぶほど、天理の教えの素晴らしさと、その普遍性がはっきりと分かってきます。

このよふのものはまりのねをほらそ

ちからあるならほりきりてみよ 五号 85

このねをほりきりさいかしたるならどのよなものもかなうものなし

五号 86

この世の元初まりの根本を説いているから、力の限り掘り切つて考えてみるが良い。根本の理を悟ることができたならば、どのようなことが起こつてきても、これにかなうものはない、と仰せられています。

『天理教教典』に、

九億九万年は水中の住居、六千年は知恵の仕込み、三千九百九十九年は文字の仕込みと仰せられる。(29頁)

とあります。

教祖は、石上神宮の神職たちとの問答の中で、親神様の守護について、詳しく説き諭されました。すると神職たちは、「それが真実なれば、学問は嘘か」と尋ねると、教祖は、

「学問に無い、古い九億九万六千年間のこと、世界へ教えたい」

〔稿本天理教教祖伝〕117頁と仰せられたのです。

親神様は、六千年の歳月を掛けて、人間に知恵を仕込んでくださいました。その知恵を仕込んでいただいた人類は、三千九百九十九年の年月の中で文字を仕込まれ、仕込まれた文字を使うことによつて、医学や科学などの学問、倫理道徳や、いろいろな宗教を築きあげてきたのです。

親神様は、その学問や他の宗教の教えにない、九億九万六千年間のことを、私たち人間に教えたいがために、教祖をやるしとして、天保9年10月26日、この世の表に現れたのです。

私たちの初代の信仰は、直接教祖からたすけていただいた、感激から始められた信仰です。

しかし、代を重ねた私たちの信仰は、身上や事情をお見せいただくことなく、「古い九億九万六千年間のこと、世界へ教えたい」と仰せられた教祖の教えをしつかりと学び、そしてそれを実践すること

によって、親神様の存在と、御存命の教祖のお働きを確信できるよ
うになれるのだと思います。

世界の人たちに先んじて、だめ
の教えを聞かされた私たちが、こ
の教えは世界で一番であるとの信
仰信念をしっかりと持って、にを
いがけ・おたすけに励ませていた
だかねばなりません。

本当にたすかる道を伝えよう

来年1月から、いよいよ教祖百
四十年祭へ向かう、三年千日活動
が始まります。

今、コロナ禍という未曾有の感
染症によって、にをいがけ・おた
すけがでにくい、非常に悩まし
い状況ですが、今から約100年前、
大正7年から大正9年にかけて、
スペイン風邪が世界中で大流行し
ました。日本でも、当時の人口の
半分近い人が感染して、40万人以
上の方が亡くなったと言われてい
ます。

そのスペイン風邪の流行が収ま
った大正10年頃から、お道は教祖

四十年祭に向け「教勢倍加運動」
を展開しました。お道の布教師た
ちが懸命におたすけに励まれたと
ころ、教祖四十年祭までの5年間
に、実際に教勢は倍加したのです。

スペイン風邪が大流行して、大
勢の人が亡くなったということは、
家族や身近な方を亡くして嘆き悲
しんでいる人が大勢いたのです。

そんな人たちにたすけの手を差し
伸べたのが、当時のお道の布教師
でした。

これからも同じことが言えると思
います。今後このコロナ禍によ
って、世界中で悩み苦しまれる方
が大勢出てきます。そういう方に、
陽気ぐらしの教えを伝え、これが
本当にたすかる道なのだというこ
とを伝えられるのは、私たちよう
ほくしかないのです。

まずは、それぞれの教会が、し
っかりとおたすけのできる態勢を
つくり、ようほくの成人の塚であ
る教祖百四十年祭へ向かって、間
違いない道を歩ませていただき
たいと思います。

(要旨)

立教百八十五年 春季大祭祭文

これの神床にお鎮まり下さいます親神天理王命の御前に、天理教芦津大教会長
井筒梅夫、慎んで申し上げます。

親神様には、世界一れつをたすけたいとの深い思召から、日夜十全の御守護に
お護り下され、随所にたすけの理をお表し頂きまして、陽気ぐらしへと導き
下さいます親心の程は、誠に有り難く勿体ない極みでございます。この道にお
引き寄せ頂く私共は、をやの御心にお応えさせて頂きたいと思念じて、たす
け一条に勤め励まして頂いておりますが、その中にも、教祖が子供の成人をお
急き込み下さる深い親心から、定命を二十五年お締めになり、扉を開いて世界
ろくに踏み出しにお出まし下さいました尊き元一日を祈念して、この月の二
十六日にご本部にて春季大祭を執行されますので、当教会に於きまして、そ
の理を戴いて、只今から役目にあずかる者一同心を揃え、座りづとめ、陽気て
をどりを勇んで勤めて、春の大祭を執り行わせて頂きます。御前には、折柄の
寒さも厭わず、また出にくい中を参らせて頂きました芦津の道の子達が、共に
つとめに勇む状を御覧下さいまして、親神様にもお勇み下さり、世界たすけ
の一層の進展の御守護を賜りますようお願い申し上げます。

さて、去る四日の年頭ご挨拶にて、真柱様より教祖百四十年祭を執行する旨の
ご発表を頂きました。芦津に繋がる教会長、ようほくは、今年一年を来年から
始動する年祭活動に臨むための心づくり、理づくりの年と思案して、日々の暮
らしの中で教祖の御教えを実践実行し、たすけ一条に真実を尽くし伏せ込んで、
時句に相應しい成人の歩みを、一手一つに心勇んで進ませて頂く決心ござい
ます。

何卒この心定めをお受け取り下さいまして、教会長、ようほくがおたすけと丹
精に真実励むところに不思議自由の御守護を賜り、皆が勇み立つて一段と伸び
行く道へとお連れ通り下さいますよう、更には御慈悲のまに／＼、コロナ禍の
収束はもとより、世界一れつをおたすけ下さいまして、一日も早く神人和楽の
世界へお導き下さいますよう、一同と共に慎んでお願い申し上げます。

陽気におつとめを勤めた後、望

当日は感染症対策のため、プロジェクターで神殿の様子を放映し、食堂でも参拝できるようにした。参拝者は72名であった。



春の若年層育成期間

3/27

あしっスプリングフェスタ

3/30

本部・大教会の行事を通じて未来のようぼくを育成しよう



「スプリングフェスタ」最初の行事は、芦津学生会（武波直輝委員長）が中心となって実施する「徒歩団参」です。

今年からは中学生も参加できるようにになり、13歳から22歳までの若者が対象となりました。芦津に繋がる仲間と共に、おちばまでの道のりを楽しく歩きましょう。

○時間 午前8時30分詰所集合
○参加費 300円
※詳細は学生担当委員会まで

3月27日(日)
十三峠越え徒歩団参



28日は本部中庭で開催される「春の学生おちばがえり」です。「春学」は、道に繋がる学生がおちばからお聞かせいただくお話を心に治め、生活を送る上で指針とするための、学生にとって最も大切な行事です。

芦津学生会は、この行事を一年の指針をお示しいただく場と捉え、10月10日開催の「第2回芦津学生会総会」に繋げていきたいと思っています。

※詳細は学生担当委員会まで

3月28日(月)
春の学生おちばがえり



29日は大教会に移動し、中学生を対象に「わかぎの集い」を開催します。

今年は1日のみとなりますが、盛りだくさんのプログラムを用意しています。芦津に繋がる同世代の仲間と絆を深め、おつとめ練習を通しておつとめの大切さも学びましょう。

○時間 午前10時～午後7時
○持ち物 ハッピー、マスク、学生証、履き慣れた運動靴
※詳細は少年会芦津団まで

3月29日(火)
わかぎの集い



30日は「少年会芦津団総会」です。今年は第50回を記念し、少年会員が座りつとめ、よろづよ八首を勤め、日頃の練習の成果を親神様、教祖にご覧いただきます。その後は総会式典、成人門出式、お楽しみ行事を行う予定です。

○時間 午前10時より
○内容 おつとめ、式典、成人門出式、お供え作品展、お楽しみ行事
※詳細は少年会芦津団まで

3月30日(水)
第50回記念 少年会芦津団総会

修養科と修えて

《第965期修了》

ちょうどいい人との出会い

芦山都分教会

伊地知潤平(35歳)

私の家はずっとと仏教で、私も天理教を信仰しているわけではありませんでした。店のオーナーである川島勝さん(芦山都分教会)から何度か修養科のお誘いを受けていて、

立教184年 成果

初席者 60名
おさづけの理拝戴者 48名
修養科生 21名
教人 11名

立教185年 心定め

初席者 400名
おさづけの理拝戴者 200名
修養科生 100名
教人 50名



「面倒だな」と思って、ずっと断っていました。ところが、最後に誘われたときに、なんとなく「行こうかな」という気持ちになりました。

天理教のことは本当に何も知らなかったのですが、来る前は

すごく緊張して、不安でいっぱいだったのですが、教養掛の先生方、修養科の先輩、講習生、詰所の方々が優しく温かく受け入れてくれました。今思えば、自分にとって、ちょうどいい人たちばかりと出会えたからこそ、何も知らない私でも最後まで頑張ったと、神様のお引き寄せと周囲の皆様に感謝しています。以前の自分はわがままで自己中心的、常に楽をしたい思いが強い、自堕落な人間でした。しかし、ここでひのきしんをするうちに、「人のために何かをしよう」という思いが

強くなりました。「ドアを開けて、人を先に通す」といった些細なことが、気持ちよくできるようになりました。

この3カ月間は、私が今まで生きてきた中で一番濃密な凝縮された3カ月間だったと思います。「帰りたい」と思う時期もありましたが、今ではこの空気が自分に合っていて、天理教のことが好きになっています。

まだしつかりとした信仰ではありませんが、今後は教人講習会を受講するなど、もっと天理教のことを勉強したいと思っています。

教務部報

教人登録

大西 直喜(上郡)

立教184年12月23日

修養科第965期修了

伊地知潤平(芦山都)

立教185年1月27日

初席《12月》

《4名》日方

《1名》島原、芦南、大真永、芦山都、芦玉

《順序運びより 9名》

月例統計(自令和3年1月1日)至令和3年12月31日)

項目 名称 (内教会数)	初席	の おさ づけ 戴け	修 養 科 修 了	教 人
大 教 会 (1)	11	4	2	
東 津 (13)		1		
東 津 (23)	5	2	3	2
吉 野 川 (29)	2	6	1	1
島 原 (16)	4	8		1
日 方 (15)	8	7	2	
稗 島 (7)	4	2	4	2
本 津 (2)				
日 高 (2)				
始 良 (5)				
津 和 (12)				
門 司 (6)	2			1
當 別 (6)				1
大 島 (26)	9	9	7	
沖 縄 (3)				
尼 崎 (2)		2		
四 山 (5)			1	1
大 冠 (2)				1
島 下 (1)				
天 山 (3)	1			
保 木 (1)				
青 浪 (1)		1		
芦 邊 (1)	1	1	1	
芦 華 (1)				
芦 津 (1)				
天 入 (1)				
豊 野 (1)				
紀 周 (3)	7	1		
勝 明 (1)				
神 島 (1)				
兵 眞 洲 (1)	1			1
庫 ノ 郷 (2)				
芦 明 勇 (2)				
明 道 (1)		1		
芦 東 (1)				
和 鎮 (3)		2		
神 滝 本 (1)				
芦 明 徳 (1)	1	1		
眞 彰 化 (2)				
本 氣 (2)				
芦 明 照 (1)				
眞 伯 (1)				
合 計 (209)	56	48	21	11